

〔翻 訳〕

マルクスの“筆跡”と犯罪学

Kurt Müller

尼 寺 義 弘 訳

この記事は DDR の週刊新聞 《Wochenpost》 1983 年 7 号に掲載された Kurt Müller の対談の記録である。原文の表題は 《Meine Jahre mit Marx》 である。『阪南論集』社会科学編 第22巻第1号掲載の記事「マルクスと私」とを合わせて読んで頂ければ幸である。訳出にあたり Dr. A. Kröber と H. J. Petter として公文等氏に御教示を得た。厚く御礼申し上げたい。

《Wochenpost》の Lothar Popp—〔以下、W. P. と略す—訳者〕：《ミュラー入門書》すなわちマルクスとエンゲルスの筆跡の解説のための教科書をあなたのライフ・ワークと言うことができますか。

Kurt Müller—〔以下、K. M. と略す—訳者〕：それは言えません。マルクスとエンゲルスの筆跡を解説することは言わば年金生活に入ってから私の仕事（老年の仕事）でした。年金生活者として私は彼らの筆跡を研究し、それをとおしてマルクスや彼の家族、エンゲルスとともに生きてきました。けれどもそれまでには長い道程がありました。わが国では労働者が学問上の業績をあげることは決して珍しいことではありません。もちろん私が筆跡に興味をもちはじめたころは一度でもこのような仕事をなしとげることができるとは夢にも思いませんでした。けれどもそれは50年も前のことであり今とは異なる時代〔ナチの時代—訳者〕でした。

W. P.：筆跡についての関心はどうして生まれましたか。

K. M.：ナチがドレスデンの共産主義青年同盟の私達のグループを起訴したのは1934年でし



クルト・ミュラー
(退 役 少 佐)

た。私は1920年よりファシズムに反対しそれと闘うために SPD（ドイツ社会民主党）の党员となっていました。1933年11月7日私達はドイツ帝国議会議事堂放火事件の真実を手書きのビラや壁にスローガンを書いて宣伝したかどで逮捕されました。ゲシュタポ（ドイツ秘密国家警察）は私達に自分自身の履歴を書かせ、いつも書かせて、そして誰がそのビラに何を書いたかを、私達一人一人に面と向かって「これはおまえが書いたのではないか」と言いました。ゲシュタポは簡単に筆跡を比較対照したのです。しばらくの間一緒に監房に閉じ込められた有罪の文書偽造犯がその事情を明らかにしてくれました。どうすれば筆跡は偽造することができるか、という事情です。そこで私は——意図したわけではないのですが——はじめて犯罪学と筆跡学を知ることになりました。仮釈放ののち多くの疑問に対する答えを書物のなかに求めまし

た。

W. P.: その知識は 刑事にとって確かにまだ充分なものとは言えなかったのではないですか。

K. M.: その通りです。ファシズムの崩壊後数カ月して私はザクセン州刑事局に任命されました。私の同志たちは、「私達は厳密で政治的に意識的な人間を必要としている」と語りました。鑑識課課長代理としての私の仕事には刑事上のそして政治上の法律違反者の立証が問題でした。そのためには民間の筆跡専門家との協力はもちろん必要でした。けれども私にはない彼らの知識をけって彼らは洩らさなかったのです。私が教えを乞うたあるブルジョア筆跡学者は私の職業を聞いてあざけり笑いました。錠前工……。こうした人々の幾人かが以前ゲシュタポのために働いたことを文書にもとずいて突きとめました。私達にとって重要だったことは私達が人民警察の一員としてこうした人々から独立するためにすばやく必要な知識を身につけることでした。

働き、学び、教えること——これが最初のころの生活の中味を決定しました。しばらくたってから私はさきの筆跡学者と鑑定人としてある裁判で対決することになりました。それは最初の私の鑑定でしたが私達はその裁判に勝ちました。私の鑑定の方がすぐれていたのです。

私は自分の知識・認識を30人をこえる将来の筆跡専門家の養成のためにつぎつぎと与えました。最初はドレスデンで、ついでベルリンの筆跡比較センターの指導者として、1952年より1963年までは DVP（ドイツ人民警察）の犯罪技術研究所において。ナチ政権に迫害された者として私は60才で年金生活者となりました。筆跡の解読は非常に頭の疲れる仕事です。

W. P.: だが一体どうしてあなたはマルクスの筆跡と出会うことになったのですか。

K. M.: マルクス・レーニン主義研究所の同志たちが、マルクスとエンゲルスの著作集の出版にさいして、私が彼らを援助することができかどうかをみるために1964年に私を招待した

のです。マルクスの難解な文字とマルクスとエンゲルスによって用いられた省略語の多くはほとんど解読できませんでした。エンゲルスでさえ『資本論』の出版において彼の友の筆跡には苦労したと書いています¹⁾。長い熟慮ののち二人の筆跡の研究と解読にあたっては以前の私の仕事と同じように、あるいは、私が犯罪学で教えた通り仕事をすすめて行けばよいという結論に達しました。こうしてマルクスとエンゲルスの筆跡を研究することになったのです。

W. P.: マルクスの筆跡はどのようなものですか。

K. M.: マルクスの筆跡は斜に切られた尖端のある鋼鉄ペン²⁾ で書かれたように見えます。マルクスは最初はドイツ語文字(カメの甲文字)で、後年にはもっぱらラテン文字体(ローマ字体)で著述しました。私は個々の字母を書き手のもつあらゆる特徴で系統づけねばなりませんでした。そのさい筆跡が年令とともに変化し、どこでそしてどのような条件のもとで書かれたのかという事情もある役割を演じていること、それらのことを考慮しなければならなかったのです。まったく別の問題は省略語のことです。1967年に私は、君たちジャーナリストが『ミューラー入門書』と呼んでいる体系的な論文を提出することができました。その論文はベルリンの研究所やまたたとえばモスクワや東京でも利用されています³⁾。

W. P.: どのようにしてマルクスの利用した省略語を解読したのですか。

K. M.: もともとこの仕事のために二年間が予定されていました。マルクスとエンゲルスはすごい問題を解決し、非常に多く著述し、紙を節約しました。マルクスが述べたように経済性が、節約が大切なことであったのです⁴⁾。そのうえ二人はつねに最も適切な表現に意を用い、ときには外国語でも表現しました。このようにして彼らはほとんど解読できない速記の記号に近いような短縮記号を用いたわけです。そして私はある体系を発見するまでは先に進むことができなかったのです。この体系はつぎの事情に

E	E5				E5				E5				E5											
e	e												e											
F	F				F				F				F											
f	f												f											
G	G				G				G				G											
g	g												g											
H	H				H				H				H											
h	h												h											
I	I				I				I				I											
i	i												i											
J	J				J				J				J											
j	j												j											

Page:3

基づいていました。すなわちマルクスとエンゲルスは学校でラテン語を学びました。二人はラテン語の方法で短縮ししかもそれをドイツ語の筆記体にも利用していたのです。これがカギでした。こうして短縮形がアルファベット順に並

べられ解読されました。そのさい他の筆跡との比較対照からつねに新しい認識がありました。

W. P.: それには時間がかかったでしょうね。

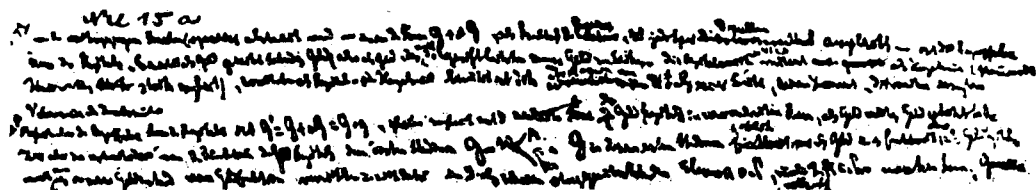
K. M.: 二年と思ったことが十年かかりまし

Karl Marx

Abkürzungen von Worten die durch keine Abkürzungszeichen gekenn -
zeichnet sind

Abkürzungen	Schriftart
Arbit	= Arbit = Arb/e/it = Arbeit deutsch
Arbitr	= Arbitr = Arb/e/it/e/r = Arbeiter "
Arbitrbevölk	= Arbitrbevölkrg = Arb/e/it/e/rbevölk/e/r/un/g "
Arbitrkasse	= Arbitrkasse = Arb/e/it/e/rk/la/sse = Arbeiterklasse "
Arbeitslohn	= Arbeitslohn = Arb/e/itslohn = Arbeitslohn "
Arbeitstags	= Arbeitstags = Arb/e/itst/a/g/e/s = Arbeitstages "
Arbeitszeit	= Arbeitszeit = Arb/e/itsz/e/it = Arbeitszeit "
Auffassung	= Auffassung = Auff/a/ssu/n/g = Auffassung "
Anwesenheit	= Anwesenheit = Anw/e/s/en/heit = Anwesenheit "
Bedürfnisse	= Bedürfnisse = B/e/d/ür/f/n/i/sse = Bedürfnisse "
Behauptung	= Behauptung = Beh/au/ptu/n/g = Behauptung "
Bevölkerung	= Bevölkerung = Bevölk/erun/g = Bevölkerung "
Kapital	= Capital = C/a/pit/a/l = Kapital "
Capitalstasse	= Capitalstasse = C/a/pit/a/l/i/st/en/k/la/sse "
Darstellung	= Darstellung = D/ar/st/e/ll/un/g = Darstellung "
England	= England = Engl/an/d = England "
Eigentum	= Eigentum = E/i/g/e/nthum = Eigentum "
Fortschritt	= Fortschritt = F/or/tsch/r/itt = Fortschritt "
Folge	= Folge = F/o/lge = Folge "

マルクスのテキストの省略語 『ミュラー入門書』より



マルクスの“象形文字” —『資本論』第2巻 草稿より

た。もしもマルクスの筆跡を問題にする人がいるとすれば、どのような寛大な教師であってもこの筆跡に対して不合格を与えたであろう、と言うことにかかられます。マルクス自身それで大いに苦労しました。1855年2月のエンゲルス宛への手紙で彼はつぎのように書いています。「私は経済学に関する自分の手書きノートを通読しなければならなかったことにより眼病をわずらった。私の眼も巻き添えをくい1日4時間以上仕事をするができなかった。眼は翌日には休養して回復しなければならなかった。」⁶⁾

W. P.: あなたは他の文献やマルクスの生きた時代や彼の家族の研究もしなければならなかったのではないのでしょうか。

K. M.: たとえば前世紀の正書法は今日とはまったく異なっていました⁶⁾。グリム兄弟の辞書が当時のつづり方を説明してくれました。私が単語を解読し字母を数えると、しばしば一つだけ余分の字母がありました。多くのものは当時 „h“ をともなって、たとえば „Urteil“ は „Urtheil“ と、あるいはたとえば „dies“ は „diesz“ と書かれていました。

W. P.: 当時はまだ Duden がありませんでしたからねえ。

K. M.: そうです。各人は自分の裁量で書きました。けれどもそのことは一面にすぎません。手紙を読むことによって私はマルクス一家の日常生活やお金に困っていることや子供たちの誕生と死を見ることができました⁷⁾。私は、マルクスに感動を与えたことやそしてしばしば意気消沈させることが、彼の筆跡にどのような姿をとって実現されているかを読み取りました。マルクスはいつも健康ではありませんでした。彼はたとえばおでこで悩んでいました。長

く座っていることができず横になったままで手紙を書かなければなりませんでした。その時の筆跡からそれがわかるのです。

W. P.: 筆跡の解読によってマルクスの著作集が、どれほど一層正確に出版されるようになったのか、その例を掲げて下さい。

K. M.: 出版にあたって正確さが、書かれたテキストの文字どおりの模写が必要でした。研究所の私達の仕事によってマルクス・エンゲルスの著作の出版で意味をゆがめる誤りは訂正されました。それらの誤りは編集作業中のテキストの改訂のときに発見されました。若干の例はつぎのとおりです。補巻第1部45ページ《dieses Prinzip》ではなく《dieser Zwang》、同65ページ《Samen》ではなく《Sonnen》、第34巻425ページ《Vivisektion》(Tieruntersuchung)ではなく《Desinfektion》⁸⁾〔以上の三箇所とも原文ページ——訳者〕。40巻からなる著作集に対してそれぞれの著作が、それぞれの手紙がもう一度体系的に吟味され、多くの点が訂正されたのです。

W. P.: そういうマルクスですが、彼についてどう思われますか。

K. M.: 私はマルクスの多くの業績にも、教養の高い人間にも、偉大な精神にもつねに感嘆していました。マルクスは8カ国語を流暢に話しました⁹⁾。ブルジョア出身の人間として彼は労働者の事情をよく理解し彼らの中へ自己を深めることを心得ていました。彼は天才でしたがいつも素朴な人間でした。それだからこそ私がいくら彼の筆跡で悩まされようと彼の生活が、彼の創作活動が私にとって手本でした。

注

- 1) F. Engels: „Vorwort“ zur Zweiter Band „des Kapitals“, M-E-W, Bd. 24. Dietz Verlag Berlin 1963, S. 7.

なお、H.ゲムコー「マルクスの“筆跡”の研究」拙訳『阪南論集』社会科学編第21巻第4号、1986年、参照。

エンゲルスはさらにつぎのように述べている。

》この筆跡、この単語および文の省略を解読できるただ一人の生存者は私である。カール・マルクスの死後エンゲルスの Lawrow あてへの手紙。F. Engels an Pjotr Lawrowitsch Lawrow, 5. 2. 1884, In: M-E-W, Bd. 36, S. 99.

2) クルト・ミュラーによれば „マルクスはつねにペン先の尖端が左斜に研がれたペン（右利の人）を用いていた。この種類のペンのために „Ly-Feder“ という商標（ペン先の胴の部分に „Ly“ のトレード・マークがある）をつけて売られるようになった。“

- 3) Kurt Müller: Die systematische Entzifferung von schwerlesbaren Handschriften unter besonderer Berücksichtigung der Handschriften von Karl Marx und Friedrich Engels, Institut für Marxismus-Leninismus in Berlin 1967.

1920年代よりモスクワのマルクス・エンゲルス研究所ではマルクスとエンゲルスの筆跡が体系的に研究されている。解読者たちは、最初は Franz Schiller の指揮下で、後には Nina Nepomnjaschtschaja によって指導され、一つの固有の部門となる。ロシア人である Paul Weller はマルクスの難解な文字をけんめいに研究する。Nina N. は44年間にわたって二人のドイツ古典作家の筆跡を解読している。解読方法の体系性と完全性は1967年の《ミュラー入門書》で達せられる。

〔Wochenpost〕の解説より一訳者〕

- 4) たとえば1枚の紙に普通の場合 „20行“ 書くものを „30行“ 書くというようにである。この „節約“ はマルクスのいわば „生活信条“ に近いものである。なお „時間の節約“ についてはつぎを参照せよ。

K. Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag Berlin 1953, S. 89.

- 5) K. Marx an F. Engels, 13. 2. 1855. In: M-E-W, Bd. 28, S. 434. この手紙の本文部分は原文と若干異なる。

- 6) ドイツ語の „正書法“ およびその変遷については以下の文献を参照されたい。相良守峯『ドイツ語学概論』博友社、1978年。小島公一郎『ドイツ語史』大学書林、1964年。Hugo Moser: Deutsche Sprachgeschichte, Max Niemeyer Verlag Tübingen 1965. 国松孝二他訳 H. モーザー『ドイツ語の歴史』白水社、1971年。

- 7) こうした手紙はゲムコー教授によれば約200通あるといわれる。なお以下の文献も参照されたい。

H. Gemkow: Unser Leben Dietz Verlag Berlin, 1983. S. 137 ff.

- 8) 最近の全集すなわち M-E-W, Bd. 40, S. 45., S. 65. 1985. および Bd. 34, S. 425., 4. Aufl., 1983. でもこの三箇所は訂正されていない。メガでは《Samen》が《Saamen》と校訂されている。MEGA IV/1 Dietz Verlag Berlin, 1976. S. 32.

- 9) ドイツ語、英語、フランス語、ラテン語、ギリシア語、スペイン語、イタリア語、ロシア語。

(1986年7月11日受理)

追白

注の作成において Prof. Dr. H. Gemkow および Prof. Dr. H. Schwab よりいろいろと御教示を得たことをお伝えし、感謝の意を表する。(訳者)